



メリーメリー

機里

朝焼けがカーテンの隙間から、ベッドに差し込む。一緒に暮らす彼の腕の中で、私は寒さに身を縮める。私のよく知る彼の体は、最近、妙に引き締まってきた。

小さな違和感。さざ波のような不協和音。

ひとり、夜に目を覚ますと、二人の時間が知らず終わりに近づいていると感じて、涙がこぼれる。

私は、彼の腕に噛みついてみる。

「いってきます」

いつもの朝のあいさつ。私はできる限りの笑顔を浮かべて、玄関に立つ。彼は、手招きをする。彼の元によっていく。彼は私を抱き、触れるだけの短いキスをする。その短い時間に、彼の匂いを味わう。

その匂いが、私の涙腺を刺激する。いつもと同じはずの朝の日課。彼の優しさが際立って見える。

玄関が閉まる。途端に、寂しさが私を襲う。でも、一緒にいると不安。

私はまた泣いている。いつからこんなに泣き虫になってしまったのだろう。

彼のせい。

それとも、私？

カフェのアルバイトを終え、私は、小さなマンションの一室へと帰ってきた。ポストに入っていた携帯電話の請求書の封を破る。私ではなくて彼の。私は、請求額に目を通す。

一万円を超える請求額。明らかに高い通話料金。いったい誰と電話をしているんだろう。

ここ数カ月、請求額は変わらない。

夕食の準備が整い、彼の帰りを待つ。営業の仕事をしている彼は、一概に帰宅時間が同じとはいえないけれど、おおよその時間にあわせて準備をする。

静かなボリュームで流していたオーディオの音に、耳障りな振動音。

私は携帯電話を耳にあてる。

「ごめん！」

開口一番の謝罪の言葉。

やっぱり。

私はもう、この続きの言葉を知っている。

「また？」

だから私は先回りして言葉を紡ぐ。

「そうなんだよ。今日も外回りの関係で遅くなりそうなんだ。恵、先に晩飯食っちゃっていいから。じゃ」

彼は矢継ぎ早にそれだけを伝えると、一方的に電話を切った。

取り残されたような感覚が、ツーツーという電子音とともに私を包む。

お風呂から上がると、玄関から鍵を回す音が聞こえてきた。

「ただいまー」

私は髪をタオルで拭きながら、彼を出迎える。

「おかえり」

言いながら、彼を観察する。

朝と少し違う髪型。どことなく幸せそうな笑み。

試しに、私は彼の体に抱きついてみる。寂しさに耐えかねた風に装って。

「よしよし、寂しかったのか」

彼はこんな時、私の狙った通りの反応を返してくれる。私のかゆいところをよく知っている。それと同じように、私も彼の癖や考えていることをよく知っている、思っていた。

数か月前までは。

今は、もうわからない。

彼から体を離す時に、微かに甘い匂いがした。

甘い、私の知らない、石鹸の香り。

彼はその夜、ベッドの中でこんな提案をした。

「来週末はクリスマスだろ。久しぶりにスケートにでも行こうか？」

初デートも、今と同じ季節でスケートに行ったことを、彼は覚えているだろうか？

いや、きっと忘れてる。彼は、記念日や誕生日を覚えるのが苦手だ。

「うん、行きたい」

私は返事をする。クリスマスも、きっと彼は仕事だと言って出ていってしまうと思っていた。その予想が外れたことが少しだけ嬉しかった。

でも、私の大事に育てた彼への疑念は、ちっともしぼんでくれない。

その日は、ホワイトクリスマスになった。いつぶりのデートだろう。

彼と一緒に暮らすことになってから二人の時間は増えた。かわりに二人ででかけることは少なくなってしまった。

それが、いけなかったんだろうか？

一定の距離が、私たちの間を取り持っていたということなんだろうか？

どんなに彼のことで不安になったとしても、彼に会うことで、すべての不安は嘘のように晴れていたあの頃がいとしくて、悲しくなった。

ふわりふわり、宙を舞う粉雪は、私の心と違ってこの国の人々の心を喜ばせているんだろうと考えた。私の心には一層みじめさが積もっていく。

彼が連れてきてくれたのは、この町でひとつしかない屋外のスケートリンク。出発が遅くなったせいで、着いた頃には夕方になっていた。

貸し靴を受け取り、彼は私を放ってリンクへと入っていく。

そんな姿を出会った頃は、年上なのに子どもっぽくてかわいいと思っていた。けど今は、大人げないとしか思えない。

私は無理やりの笑顔を浮かべて、以前と変わらない私を演じる。

うまくやれているだろうか？

彼と二人リンクを滑っていく。数年ぶりのスケートは、足がとられて冷やりとさせられる。バランスを取ることに集中したい。でも彼はそうさせてくれない。

私と同じ年数のブランクがあるとは思えない滑りを見せる。

なぜ？

疑問符が私の頭の中を支配する。

なぜそんなに滑ることができるの？

いつきていたの？

誰と？

私はそれらの言葉を口に出すことができない。出した瞬間に終わってしまいそうな予感がして。

リンクから上がった。それは、私が休みたいと伝えたから。

体ではなく、本当は心を休めたい。

ついてこなくていいのに、彼も一緒になって私のむかひに座る。

その時、彼の携帯電話の着信メロディが鳴った。

彼は、ちょっと、と言って席を外す。

それが、私の我慢の限界だった。

彼は今までずっと、誰から電話がかかってきても、私の前で電話を受けた。

大きく膨らんでいた疑念は、確信へと姿を変えた。

彼が戻ってきた。私は、終わってしまってもいいと心を決めていた。

粉雪は変わらずに降り続けている。まるで、二人を隔てるカーテンみたいに。

「あ、護くんやっぱりここにいた」

彼の顔が、隠しごとがバレたときに見せるそれになる。右上をさっと見る、眼球の動き。現れたのは、化粧の濃い知らない女。

「あ、亜理紗っ」

名前呼びあう関係なの？

「これが、護くんの彼女さんね。私、見かねて出てきちゃったのよ」

「今出てこられたら困るなあ」

「さっきの状態のままより、よっぽどマシよ」

私を放っておいて交わされる会話。

こんな扱いは嫌だ。

私は、怖気づく自分を叱咤して割りこむ。

「私を裏切ったの？ 二人の関係はなんなの？ どうしてこうなっちゃったの？ 護はもう、私のこと、好きじゃないの？」

知らず、大きな声が出ていた。

周りの人の視線が私たちにそそがれる。でも、もう抑えることなんてできなかった。

「ちょっと、やっぱり盛大に勘違いされてるじゃない」

こんな状況なのに、女はそんなごまかしをする。

「勘違いじゃないわ。護、ちゃんと説明してよ！」

叫ぶ。

今までの不安を吐き出す。

「いや、あの、これは」

彼はあわてているだけで、何も言えない。言えやしない。

私がそんな彼の姿に呆れそうになった時、夕陽の光は消え、リンク内のライトアップが始まった。極彩色のライトが私たちに降りそそぐ。

だけど、それは私の苛立ちを加速させることくらいにしか役に立たない。

「埒があかないわね。はじめましょうか」

私と護の会話に、女が割り込む。何を始めるっていつのか。

女は、指を鳴らし、媚を売るような笑顔を私にむける。

すると、リンクに音楽が流れた。

同時にリンク内へとむかう女。

私は、呆気にとられる。女の考えがわからない。

護はうつむいていて、私と視線をあわせようとしない。

「曲を聴いてくれないか？」

彼は呟く。

そう言われて私はいぶかしく思いながらも耳を傾けた。

その曲は、私が一番好きな曲だった。

どうということ？

私は彼の意図がわからない。

女の姿を目で追った。

女は、リンク内で踊りはじめていた。曲にあわせて。周りの視線は、その女に集まっていた。女は踊る。

極彩色のライトを反射して光る粉雪の中で。

私は不覚にも、その姿を美しいと思ってしまった。恨むべき女の姿を。

一番が終わる頃、周りの人々が動きだした。

ただの客だと思っていた人たちが、女とともに踊りはじめた。

それでようやく私は気がついた。これが私のために用意されたものなのだと。

曲が終わり、次の曲が流れはじめた。

彼が立ちあがった。何も言わずリンクへとむかって歩いていく。

ダンサーたちは、センターを空ける。彼がそこに入るために。

流れた曲は『Marry You』

彼も踊る。笑顔で。精一杯に。

動きにキレは一番なかったけれど、彼の全力だと見てわかる。

私は安堵した。それに勝る喜びも感じた。それ以外にもたくさんの感情が私の中で渦を巻いて、何がなんだかわからなくなる。

涙があふれて、前が見えない。視界がぐしゃぐしゃになっていく。

ぼやけた視界にカラフルにライトアップされた彼が近づいてくるのがわかった。

その手には何か持っている。

もう、それが何のかわかってしまった。

彼は、私の前でひざまづく。

そんなキザなのは、あなたには似合わないよ、と教えてあげたい。

けど。

けれど、嬉しくてたまらない。

手のひらには小さな箱。その箱をゆっくりと開ける。

「結婚してくれませんか？」

私はうなずく。

何度も、何度でも。

彼は私を抱きしめた。周りからは歓声があがる。

彼は何やら叫んでいる。

私は、目を閉じる。この瞬間を切り取っておくために。記憶の中に深く保存するために。

舞い続けていた粉雪は、私もふくめたすべての人を祝福していたのだと思った。